化石採集の思い出

荒　川　九兵衛

先日、福井市郷土自然科学博物館が２０才の成人式を迎えるので、記念誌に開館当時の思い出を書くようにと小林館長より言われた。今更のように月日の経つことが早いのに驚き、懐しい思い出が次から次へと湧き出る。あの頃は私も若かったお陰で「盲蛇におじず」の例で何とか協力できたのだなあと己の無暴を恥じ、穴にでも入りたいようでもあり、又本当に苦労の仕甲斐があったという喜びもわき上って来る。

話はずっと昔にさかのぼるが、昭和8年の秋福井県下で行われた陸軍の大演習の際、これを記念して実施した県下の学校を挙げて生物鉱物等の採集によって県下の自然研究はかなり深められた。立派な標本も沢山出来ると共に自然研究の同志も多く学校の理科室によく整備保管されていたが支那事変が長びいて、その上第二次の世界大戦に突入するような不幸な事態に立ちいたり、研究の熱も下火になって、同志が２、３人グループで細々と研究を続けていた。このような状態の所へ福井市では昭和２０年の大空襲と２３年の大震災と洪水で総べてを灰燼に帰してしまった。

この皆無の中で私達理科研究部の同志が学校標本の整備をめざして採集に立ち上った矢先、熊谷太三郎福井市長から昭和２７年４月開催の復興博覧会を記念して郷土博物館を設立する構想が示され、昭和２６年度中にその準備をするよう至上命令にも等しい厳しい条件下で資料蒐集が計画された。初代館長の堀先生を中心に何が何でもやりぬく決意で出発した私達、特に私には岩石、鉱物、化石等の大きな一部門が割当てられ、酒井義一先生、森瀬俊蔵先生のよき２人の協力者を得て出発した。元来力不足を知っている私、果してこの１年間に資料が集まるかどうか不安でならない。然し堀先生を始め諸先生方の御指導協力で採集の第一歩を踏み出したが全く今から考えると無暴の１語につきる。それから土、日曜は勿論休日もなく採集の連続で何日も泊りがけで出かけた。そして県下をひと通りかけ巡り、主な採集品を何とか揃えることが出来た。然し当時は今日のように道路もよくない上交通も不便で重いリックを背負って遠い道を歩かなければならず本当に苦労をした。

それでも幸なことに化石の採集地は現在のように荒されていなくて、保存がよかったのと戦時中地下資源を求めて各地で鉱山が開発され、当時でも続行していた鉱山もかなりあって、廃鉱であってもそれ程月日がたっていないため、採集には本当に好都合であった。現在昭和２６年当時出かけた各地は殆どと言ってよい位に雑木雑草が生い茂り採集はおろか現場に近づくことも出来ない。坑道はくずれ　化石採集地は荒れに荒され放題で１日出かけてもリックサックは空で帰ること何回も

ある。全く今昔の感があり、本当に恵まれた時期であったと喜びもひとしおである。現在博物館に陳列保管されている数千の資料1ケ1ケが私達の手にかかったもので我が子同様懐しい思い出のものばかりである。しかも得がたい大切な大切な資料である。

特に採集に当って思い出に残るのは石徹白村を含む奥越、芋ケ平、下市深谷金屋鮎川を含めた丹生山系。小和清水を中心にしたジュラ層の美山町池田町。灘波江、小黒飯等の化石産地高浜町等の化石採集を中心にしたものである。

ここで一番多く足を運んだ奥越に思いをはせて見る。

私達は先づ朝日中学校を訪ね、山田先生から下穴馬地方の採集地について詳しく指導を受けると同時に同校に保管された立派な動植物化石を見せてもらった。果して私達もあのような立派な物が手に入るかどうか不安と期待で先づ貝皿の採集地に出かけた。然し仲々に大変なことである。めざす化石には仲々出会わさない。でも一行は根気よく岩壁を大きなつるはしで砕いている中に、突然大きなアンモナイトの化石の1部が現われた。その時の喜びと感激は今も忘れられない。3人は飛び上って歓声を放ち、それから時間をかけて大事に大事に採集し、遂にずっしりと重い立派な化石が私の両手で持ち挙げられた。この化石は現在本館保管のアンモナイトの中で一番大型の化石ライネキアーの一種で、3階入口のケースに陳列されている。

同じく貝皿での思い出として総合採集の一行が部落を通っている時土地の人が蛇の化石を持っていると話して下さったので早速見せていただくため、その方の家を訪れると主人は大事そうに持ち出して来られた化石、本当に蛇がどくろを巻いているように見られるのも無理なく、アンモナイトのカリセロセラスの一種であった。一行は博物館に是非寄贈して下さるよう懇願したところ快よく承知して下さった。又伊月では道の傍の断崖を這い降りて河原に出たらコルビクラの見事な化石が見つかり皆で飛びついて割ったものだった。

次の日の朝日より石徹白川に沿って約18㎞上流にある石徹白村下在所に向った。私達3人は早朝朝日の宿を出て途中各所で採集をしながら夏の強い日ざしを浴び汗とほこりにまみれて夕方ようやく石徹白の下在所についた時の印象はいまも忘れられない。全く異郷に来たような感がした。下在所から上在所にかけては高原独持の風景で焼畑に木の切株が散在し、そこに稗や粟が作られ、田畑で働いている主婦達は何処となく品位があり京都の郊外にでも来たようで、私達の想像していた世界と全く別であった。従って情緒も豊かで本当によい処であった。後で聞いた宿の古老の話でその謎は解けた。それから以後数回採集に出かけたがその中で忘れることの出来ない苦しい思い出がある。

それは、総合採集で芦倉山へ登ったときのことである。一行は午前6時宿を出てガイド

の案内で先づ白山神社境内の大杉林を見て道のない山腹を登って尾根に出てそれより芦倉の頂上をめざしたのだが尾根の両面はブナの大自然林で巨木が密生してジャングルを思わせる風景である。したがって一行は足許の雑草や下枝を切り払って一歩一歩木の根、灌水を踏みしめて樹海を泳ぐような姿で進んだ。頂上についた頃は午後2時頃になってしまった。一行は疲れを休める暇もなく、すすきの原を分けて下山の途についた。然し山は険しく立って歩くことが出来ずすすきの上を尻で約２００m位をすべり下りて谷に出た。これから谷の流れに沿って下るのだが行手に竜があったり大きな岩石があって中々すすまない。特に竜には困ってしまう。大廻りするにも両面は切り立った険しい岩壁でそれもできず木の枝や葉の根をふみかためながら時間をかけて下りるので時計の針は遠慮なく廻り、その上竜は次から次へと現れ来るので閉口してしまった。然し一行は苦労して漸く難所を切りぬけてブナ伐採の索道にたどりついた。その頃は長い夏の日も西に傾きかけていた。皆は空腹と疲労をおさえ励まし合って林道に降り立った頃はうす暗くなりかけてしまった。然しそれでも宿まで帰らねばならない。重い足をひきずりながら在所の村はずれに近づいた頃前方に提灯の火が2つ3つゆれて近づいて来るのに出会った。よく見ると堀先生と宿の人々で帰りが余りにも遅いので心配して迎えに来て下さったのだった。一同は手を握りあってまるで地獄で仏に会ったような喜び方で無事に帰りつけたことを喜んだものだった。今少し遅れていたら捜索隊を繰出すことだったという。その後、此の採集行に参加した者が会う度毎に芦倉山採集行のことが話題にのぼるのである。

その他　大谷の九頭竜川で水浴した時水のつめたさ、夕食に出された鯉の刺身の味のよかったこと、苦しい採集行であるだけに思い出が仲々に尽きない。

まだまだ思い出は限りないが採集されたひとつひとつに思い出は残り　生涯忘れられそうにもない。とても金銭にかえられない尊い宝物である。後の人々も此の苦労の生産物を大事に保管して下さるよう願ってやまない。

藤岡中学校長